

イ 若狭街道



図2-69 若狭街道

若狭街道は、京都の北部山間を経て若狭に抜ける道である。平安京以来の古道で、若狭で獲れた魚介類を京都に運ぶための重要な街道であったことから魚街道、鯖街道と呼ばれ、往来も多かった。また、この街道沿いの大原などは自然風景豊かな山里として、貴人の隠棲の地としても知られている。

(7) 大原

a 貴人の隠棲地

大原は、静かな山里であり四季の移ろい豊かな自然環境を持ち、かつては貴人の別荘や隠棲地ともなっていた。街道から西に入り進んでいくと姿を現す寂光院は、源平合戦の後、建礼門院徳子がその子安徳天皇の菩提を弔い余生を送った地として知られる。また、街道の東に位置する三千院は、魚山^{ぎょざん}声明^{しょうめい}を伝えることで知られる。伝教大師最澄が比叡山の東塔南谷に開いた草庵に始まり、12世紀より宮門跡となり、梶井門跡とも称した。その時、天台宗の声明の道場であった大原魚山（来迎院、勝林院、往生極楽院など）を管理することになり、大原に政所を設けたのが現在の三千院の前身である。声明とは、お経に節をつけて詠むもので、

宗教音楽であるともいわれる。往生極楽院阿弥陀堂（重要文化財）はこけら葺の仏堂で、久安4年（1148）の造営と見られている。この界限は、現在は農業と観光を中心とした地区であるが、隠棲の里として特有の雰囲気醸成し、四季折々の眺めは市中とは違った趣がある。

この三千院では、2月の初午大根炊きでは地元大原で栽培された大根が使われ、多くの参拝者で賑わいをみせ、また、12月には大原の地域で托鉢寒行が行われ、師走を感じさせるなど、地域と結びついた様々な年中行事が行われる。

b 山里としての営み

高野川の川上に開けた大原の里は、かつて貴人が好んで隠棲した地であったことから分かるように、四季の移ろい豊かな自然風景を形成している。また、伝統的な様式の農家建築などが今もなお残り、里山の風情を一層引き立てている。この農家建築は北山における一般的なものであり、中規模の農家建築が建てられるのは近世半ば以降と考えられている。

夏には山に囲まれた青い稲田の中に赤紫の紫蘇畑が入り混じって織りなす景色が美しい。この赤紫蘇は京漬物のしば漬けの材料にするもので、これ程たくさん作る紫蘇畑は珍しい。

このしば漬^{しばづけ}けは、古くからの大原の特産で、その昔、寂光院^{じゃっこういん}に住まわれた建礼門院に土地の人が献上したところ喜ばれて、しば漬けの名を賜ったのがはじまりだという。その歴史は古いが、元は自家用として漬けられていたようで、後に特産となり、明治後期に発行された「京都府愛宕郡村誌」には、大原村の名産として紹介されている。

大原でこの赤紫蘇を伝統的に作るのは気候条件が適しているからである。一般に、紫蘇は夏の始めには赤紫蘇の美しい色をしているが、梅雨が明けて土用に入り、気温が30度を超すようになると色が褪せてくる。ところが大原では夏でもそれ程気温が上がらないことから、夏の間、美しい色を保ち続ける。

また、紫蘇の葉は、しなびやすいものであるため、地元で作る方がよいということも産地が大原から移動しない理由である。

街道から江文峠への道の傍らに、大原八ヶ町